

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2006年3月

## 博士論文審査報告書

論文題目 「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」の  
考察—待遇表現教育の観点から—

申請者氏名 金 東奎 (キム ドンギユ)

本論文は、「敬語表現」の生成過程としての「敬語表現化」に関する考察であり、日本語における「敬語表現化」の問題を「待遇コミュニケーション」の観点から捉えることにより、待遇表現教育における新たな考え方を提示したものである。

従来の待遇表現教育においては初級後期の段階で、敬語を「語」のレベルで扱うことが多く、そのような教育のあり方に対する問題点が指摘されてきた。実際の場面における「敬語表現」の本質を明らかにするためには、「語」としての敬語の形式や意味だけではなく、文章・談話のレベルにおいて、「通常表現」がどのように「敬語表現」になるのかという仕組みを解明しなければならない。

本論文においては「通常表現」を「敬語表現」にすることを「敬語表現化」と名づけ、その仕組みを理論的に解明しようと試みており、「敬語表現化」は、「表現主体」に内在する「内言」としての「ゲンザイ」によって構成された、「内言」としての「通常表現」に「敬語表現化要素」を総合的に働かせることで、「敬語表現」として「外言」とする一連の過程であると捉えている。

「内言」から「外言」へという「表現行為」の過程に注目し、図式的にモデル化するとともに、その過程に関わる諸要素を「敬語表現化要素」と名づけ分析をしている点に、本論文の独自性があると言える。

「敬語表現化要素」は、さらに「敬語表現意識」「敬語表現認識」「敬語知識」の三項目に分類され、それぞれについて詳しい分析がなされている。

「敬語表現意識」の問題としては、「敬語表現意図」、「尊重」の意識、「敬語」や「敬語表現」の普遍性等について、「敬語表現認識」の問題としては、「上下・親疎」「立場・役割」の軸を中心とする「人間関係」、「あらたまり・くだけ」「時間・空間」の軸を中心とする「場」、「題材・内容」等について、「敬語知識」の問題としては、「丁重語」、「オ・ゴ〜ダ」、「オ・ゴ〜ニナル」と「レル・ラレル」、「オ・ゴ〜スル」等についての諸問題が分析、考察されており、それぞれが「敬語表現教育」へどう適用されるかについても検討されている。個々の考察は、従来の研究成果に基づくものではあるが、それらを「敬語表現化要素」として捉え直している点に独自性が認められる。

後半は、待遇表現教育における「敬語表現化」の適用と「文話」（文章・談話の総称）における「敬語表現化」の諸相が考察され、「敬語表現化」が、日本語や日本語教育の研究として、どのように適用できるのかが論じられている。

日本語教育において待遇表現を考える場合に、「語」「語形」の単位に限定せず、「表

現主体」の「意図」や「場面」等との関係から考えるべきことを検討した論文として、基本的に妥当な考え方に基づいており、最近の諸文献を押さえつつ、安定した論を展開している点は評価できる。また、待遇コミュニケーションにおける、最終的な表現形式の選択に関して、一定の理論的枠組みを作った点に独創性が認められる。

以下、今後の課題を含めて、いくつかの問題点を挙げる。

①議論に選ばれている形式の絶対数が多くなく、さらに多くの形式の選択に応用できることが明示されていない点は残念である。また、形式の選択も、実際のコミュニケーションの中で、相手とのやり取りを見据えて行っていくものなので、動的な談話過程についても議論すべきであろう。

②重要なキーワードとなっている「内言」・「外言」などの用語が一部の先行研究から述べられており、検証が必ずしも十分ではない。用語の使用の原典に当たり、その論拠を明確にすることが必要である。

③この論文のキーワードである「待遇表現化」が日本語教育にどのような意味を持つのかということについて、さらに踏み込んだ視点がほしい。例えば、はじめのところでロールプレイ等を批判的に述べ、今回は、スピーチコンテストを例として挙げているが、スピーチコンテストの改まり効果によって「待遇表現化」が効果的に図れるということなのか。「意識」「認識」「知識」という段階性に注目したことは「待遇表現」研究の新しい展開だと考えられるが、最終的な「待遇表現」教育の到達は、どのようなところになると考えるのか。言語活動全体の問題として待遇表現教育を位置づける観点が望まれる。

④「日本語を用いる諸状況の中では共通する認識がある」とあるが、この「共通する認識」とは具体的に何か。この「共通」という概念を認めるか認めないかで、教育研究の方向が変わる。認めるならば、それが具体的にどのようなものであるかを示す必要があるだろう。

⑤結論として、ⅠとⅡでそれぞれのまとめがあるが、最終的にこの研究がどのような位置づけを目指すのかという点の記述があるとよい。この研究が今後の待遇表現教育研究にどのような新しい提案を示すのかという点を最後に明確にしておくことが必要である。それは従来の研究をどのように乗り越えたか、そこにどのような問題があるのかということを確認にすることである。

以上、問題点について言及したが、全体としては、従来の待遇表現研究に不足して

いた、表現主体の意識・認識から表現に至るプロセスの問題を学習者の立場から問い直し、綿密に論証しようとした研究である。また、今後の待遇表現教育において敬語をどう考えていけばよいかという課題に対する有益な示唆が見られる優れた研究であり、博士学位取得論文として評価に値すると判断するものである。

主査 蒲谷 宏 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 川口義一 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 細川英雄 (大学院日本語教育研究科教授)